

北海道地理学会創立50周年記念 元会長からのメッセージ

## 北海道地理学会50周年に寄せて

1973～74年度会長 瀬川 秀良 (北海道教育大学名誉教授)

拝復 北海道地理学会創立50周年記念事業の一つとしての会誌75号への原稿を書いてほしい旨のお便り拝見いたしました。小生の会長をしていた1973年～1974年当時のエピソードあるいは思い出をとのことでございましたが、何しろ大分昔のことですし、記憶もさだかではありませんし、ご要望に御こたえすることは無理な様に思います。当時のことを思い出すことがないかと思って昭和48年、49年当時の日記を読みかえしてみましたら、北海道地理学会に関しては次の様な断片的な記録がありました。

昭和48年6月10日 9時半より北海道地理学会開催(札幌分校にて?)。小生会長に選ばれた。北大・八木健三氏の講演あり。

昭和48年10月13日 夜、札幌分校で北海道地理学会の幹事会を行う。

同10月14日 雨の中奥平氏の車で歌志内での北海道地理学会巡検に出発。9時半集合がおくれ、10時10分着。歌志内高校より市内巡検。

同10月15日 北大に行き、八木教授、湊教授、山口岳志氏、西川治氏に会い、北海道地理学会

として北大に地理学教室を作ってほしい旨の要望をする。

昭和49年6月6日 奥平氏より電話あり、北海道地理学会を函館で開催するにあたり商工会議所より2万円の寄付ありし由。

同日午後恵山巡検の下見に奥平氏、渡辺英郎氏と小生の3人で奥平氏の車に乗り恵山に行く。4時半すぎ帰宅。

同6月7日 北海道地理学会巡検の用意。

同6月8日 教育大函館分校で会場の用意。

同6月9日 北海道地理学会と恵山の巡検あり。

昭和49年11月2日 札幌分校で北海道地理学会幹事会を開く。赤字解消の問題、北海道地理学会を今後どうするか。地理教育を中心とするシンポの件等が問題となる。

同11月3日 札幌分校で北海道地理学会開催。会長講演を行うこととなる。

以上の様に全く断片的なことしか書かれておらず、小生の記憶も同様であり御要望に御こたえ出来ないことを申し訳なく存じます。

## 北海道地理学会50周年に寄せて

1989～90年度会長 進藤 賢一 (札幌大学)

私が北海道地理学会に入会したのは多分35年位前のことになる。釧路の高校教師から飯塚浩二教授の助手として札幌大学に赴任したころだった。飯塚さんからは北海道の研究をしっかりとやるよう

時々訓示されていたのでローカルな学会には興味を惹かれたのかもしれない。当時、東大で飯塚さんの薫陶を受けた実さん(現奈良大学)が北大工学部で助手をしていた。飯塚さんと実さんと私は

時折北大植物園などで会い、飯塚さんのご高説を賜ったものである。飯塚さんは「調査活動を通じて地域政策に結びつく実践的な研究をせよ」といった話をよくしてくれた。

同じような時期に、岡本次郎道教育大教授の誘いで実さんと3人の旭岳温泉教育大寮合宿が実現した。岡本さんのことで今でも忘れないのは「学問は全て創意と工夫、オリジナルなものでなければならない」という言葉だった。その後、岡本さんは北海道地理学会会長も努めたがこの教訓はいきているし、この言葉の重要性はいまも変わらない。

岡本次郎さんの時代には奈良部理、山本博信、古川史郎、柏村一郎、筒浦明、瀬川秀良さんなどの先輩がいて北海道地理学会を引っ張っていたころだった。既に何人かはこの世を去っている。彼ら同世代の人間関係はそれほどスムーズではなかったように思われたが後輩学徒の面倒見は抜群によかった。威張らず、仕事好き、酒好き、そして何より夢を持っていて、それを語ってくれたものである。

やがて北海道地理学会のメンバーが若返る。山

口岳志、谷内達、今井敏信、小杉健三、斎藤亮二、岩崎一孝、寺谷亮司、深石一夫、堤純、土井時久さんらは北海道を去り、東京・山口・青森・愛媛・静岡・岩手などで活躍するようになったが、在道時代、北海道地理学会での活躍には並々ならないものがあった。

会員数も少なく、学会予算も小さい北海道地理学会。全て手作りの手弁当運営、会費収入のほか、わずかな広告収入や大学の補助金などが雑誌編集や巡検費用に欠かせないものになっていた。また沼田武、高平順夫、山内正明、林隆治、三好勲先生ら高校教師の活躍があったことで、ここまでローカルな研究機関としての北海道地理学会が立派に生き延びてきたのではないだろうか。

雑誌「北海道地理」にレフリー制度を持ち込むようなことがあれば学会を脱退するといった会長もいたが、ローカルだからこそ会員の発想を大切にしようとする心からでたもののだと思った。

そして何より北海道地理学会がここまでやれてきたのは北海道教育大札幌校の事務局メンバーの献身的な努力、地道な日常活動があったからだと考えている。本当に感謝したい。

## 北海道地理学会創立50周年記念に寄せて

1995～96年度会長 奥平 忠志（札幌国際大学）

正直のところ、私が何代目の北海道地理学会の会長を務めたのかは分からない。入会したのは私が函館高専に勤めた年の1962年であったと記憶しているが、これとて定かではない。入会当時の会長は、故奈良部先生で、幹事長は故山本先生で、今も昔も事務局は北海道教育大学札幌校地理学教室に置かれ、よくぞ学会を守ってきて下さったとの感謝の念に堪えない。

自分では若いつもりが、いつの間にか定年退官、周りを見渡すと私と同年代またはそれ以上の年齢の会員は少なく、今年の50周年記念のパネルディスカッションの参加者の中でもトップクラスの年

齢に達したことが、会場を見渡して気がついた。若手の会員も増え、発表も活発になってきたことを心強く感じている。

私が会長を引き受けた時は、ちょうど北海道教育大学函館校の代議員、分校主事という厄介な役目を押しつけられた時でもあり、ほとんどの雑務は大内幹事長まかせ、幹事会も私の札幌出張にあわせて開催していただいた。幸い大内、山下、羽田野など有能な幹事が揃い、ほとんど何もせずに会を運営していただいたと感謝している。在任中の課題は、地理教育にも重点を置いて、小中高の先生方の会員を増やすことだと就任挨拶で述べ、

それを実践することであったが、ついに果たせずに任期を終えたことが今でも心残りである。

私の前任の会長は、札幌大学の進藤先生であったので、私が会長になってからは、多分活動の内容や質でも大きく後退したのではと悔やまれる。

住居を札幌に移して、早くも5年目、折角こちらに来たからには、少しでも北海道地理学会の仕事をお手伝いしたり、北海道の地理学の発展に少しでもお役に立てられればと思いつつ、今日まで結局何もせずに経過してしまった。しかも、私が函館校を退官2年前に退職し、すぐその後に貞方先生が山口大学に転出し、地理学関係2名のポストがなくなってしまいました。これは、北海道の地理学の発展に大きなマイナスとなり、私自身大きな責任を感じています。もっとも今の大学で2

名の地理学ポストを獲得したことから、帳消しだと慰めてくれる人もいますが、国立大学と私立大学のポストでは重みが違いますので、やはり私のバッドマークだと思っています。

北海道という広い地域での研究は、他府県に較べて、金も時間もかかります。地域研究の対象は北海道では無尽蔵といってよいと思いますが、まだまだ研究の実例が少なく、私を含めてこれからの会員のみなさんの取り組みと実績が期待されます。特に自然環境の保護の問題、開発と自然との共生の問題、拓銀崩壊以来の地域活性化の問題等々地理学から取り組むべき課題が山積しています。どうぞ50周年を機会に会員のみなさんの活発な研究と北海道地理学会のレベルアップ、地域への貢献に期待しています。

## 地方学会の存在意義

1997～98年度会長 土井 時久 (岩手県立大学総合政策学部)

私が北海道地理学会の会長を仰せつかったのは1997～98年度でした。当時の案件のひとつに会誌名の変更があったように記憶しています。記録によれば、この件は1996年6月の総会で既に議論されていて、翌年に結論を持ち越しています(会誌No.71, p.90)。そして、97年7月の総会で誌名は変えず、表紙のデザインは改めることにして現在に至っております(会誌No.72, p.68)。

あの頃から大学教員や研究所、試験場での研究業績審査が厳格になってきて、私の所属するいくつかの学会でも同様の議論がなされていました。地方学会への掲載論文は低く評価されたり、査読制度のない大学の紀要論文は業績として認めない等々です。したがって、地方名をつけた学会誌は、あたかも全国誌であるかのような誌名に変えた例もあります。大学の紀要には論文寄稿がなくて休刊したり、終戦直後の雑誌のような薄いものになってしまう例も珍しくありませんでした。

文部省の学会誌刊行助成方針は、(1) 国際的に

評価される学術誌であること(そのためには論文の多くが英文であること、外国の会員が一定比率以上であること)、(2) 会員が一部の地域や、特定の大学出身者に偏らないこととなっています(おそらく今でもその方針でしょう)。どの学会誌に助成すべきかの会議に出たこともあります。わが北海道地理学会が助成の対象となる可能性はまったくありませんでした。幸運にも助成を受けたとしても季刊誌で年額50万円程度です。それでも貧しい学会としては助かるのですが、当学会としては業績評価基準や助成には超然として、北海道の地理学会として運営を続けることでよいのではないのでしょうか。

地理学会は地域に根ざして狭い研究者に限定せず、関心をもつ幅の広い会員からなるところに良さがあるように思います。最近の大学では業績稼ぎに汲々として、機関銃のようにせっせと論文を連発する傾向がなくありません。査読を依頼されても、内心「もっと熟成させると一層よくなる

のに…」と思いつつ「条件つき掲載可」とすることが多いのです。たしかに日本の学術研究水準は海外の先進的なレベルに届かず、「海外への発信より吸収に熱心で、ブラックホールみたいだ」と酷評される面もあります。しかし、同好の会員が折々集って研究成果を検討しあうローカルな学会の存在意義もあるように思います。私にとっては研究発表もさることながら、そのあとの懇親会が大いに楽しいのです。これからも、そんな北海道地理学会であることを期待しております。